

# 日本山岳写真協会 選抜展「それぞれの山」

日 時／平成22年12月21日(火)～28日(火)  
会 場／コニカミノルタプラザ ギャラリーC

1	初夏の燕岳	池田 榮子
<p>一年に数度登る山であるが、この季節が一番好きである。雪がなくなり、木々の緑が鮮やかになり、花々も咲き始める。「また来たよ……」と声をかけると、槍ヶ岳がミトンのような手を振りながら「お帰りと返事をくれる。これがたまらない喜びで何度も登ってしまう山、燕岳。</p>		
2	山の音彩(ねいろ)	伊原 明弘
<p>岩の上に腰を下し、今日一日越えて来た、山道、雪渓、岩稜、頂、霧に雲に風……。時のゆくまに想い返している。何とおどやかで清々しい私の心よ……。大きな自然に溶け込み、純真で本当に素直になっている自分を感じる。悠久の時の流れと山と風……。その“音彩”と“香”と“しなやかさ”を感じていただけたら幸いである。</p>		
3	春の山稜	大石 高志
<p>日本の山は、四季の変化に富んでおり、それぞれの季節で山の貌は異なった表情を見せている。その中で春を迎える山は、厳しい冬の季節を乗り越えて、穏やかな天候が続くようになり、やさしい表情を見せてくれる。雪の表面も気温が暖かくなるにつれて、いろいろな文様が形作られてくる。日の出の山稜、午後の太陽のそれぞれが醸し出す春山の景観がそこにある。</p>		
4	朝霧長閑	小川 修
<p>大江湿原の佳景は元長蔵小屋の尾瀬沼畔が良い。季節は草木が青々とした夏が良い。朝焼け雲が去り、背後の樹影から朝陽が射し込むと朝霧がたなびき、その情景は尾瀬沼畔が絶頂を迎える。朝霧に翻ろうされていた草色は、若く美しく輝き、それはあたくも私自身がたなびく朝霧の中に同化されているかのようだ。その瞬間は私にとって生きている喜びを最も実感できるときだ。</p>		
5	尾瀬早春	鈴木 進
<p>遠く懐かしい記憶の中に吸い込まれそうな、ゆったりと流れる時間を肌感じてしばし行む。 季節を継ぐひととき。 やがて雪は解け、ミズバショウやリュウキンカが顔を出し、木道に足音も賑わうであろう!</p>		
6	鳳凰薬師岳	瀬戸口 隆司
<p>私の馴染みの山城のひとつである「鳳凰三山」。薬師岳は、初登頂以来三十数回も通い続けている山である。この山城の魅力は一言では言い尽くせない。ふるくから修験行者が通う神聖な山城ということだけでなく、花崗岩が創り出す不思議な景観や強風が鍛えたハイマツたちの屈曲した独特の姿は、この地が現世と黄泉の国との結節点であることを強く意識させる。</p>		
7	山を旅する雲	展見 昭子
<p>梅雨明けの前日、甲斐駒ヶ岳上空は雲の乱舞。白い雲がやってきた。これから、北アルプスの剣岳まで旅に出よう。チンネで遊び、立山で美しく化粧する雲。この時から私はドラマを作る雲を追って山に入っている。</p>		
8	大雪山秋彩	名取 洋
<p>北海道の屋根と呼ばれる大雪山。9月中旬には日本一早い紅葉便りが聞かれる。ナナカマドやダケカンバといった灌木類は、赤や黄色に山裾を染める。また、チングルマやウラシマツツジなどが足元を彩る。長い冬を前に一瞬の輝きが全山を覆う。</p>		
9	水晶岳・盛夏	長谷川 洋一
<p>水晶岳には、どの方面から行くにも多少の時間を要することもあり、登山者も少なく静かな山で、花々も多い。小屋も新しくなり、夕食に出る野菜カレーがなかなかの味で美味しい。山頂へは比較的容易に行くことが出来…… 360度一望出来る展望は素晴らしい。</p>		
10	コバイケイソウ咲く	畑 島 淳
<p>コバイケイソウはユリ科の多年草であるが、毎年咲き揃うわけではない。「当たり年」が4～5年に1回くる。2009年はその「当たり年」で、通い慣れた双六岳付近から、槍ヶ岳や奥黒部の山々を背景に盛夏の朝夕の光を大切に撮影した。</p>		
11	御在所岳・冬景色	林 哲 史
<p>琵琶湖を挟んで伊吹山系と比良の山並みの瞬間を吹き、シベリヤ寒気の風のぶつかる処が鈴鹿の山塊で、主峰は御在所岳。その山城に雪を降らし、乾いた風は伊吹風、鈴鹿風として大都会を抱えた濃尾平野に吹き渡る。将に、シベリヤ寒気団の回廊でもある。この風が創る風景は観る者にひと時を桃源郷へと誘ってくれる。</p>		
12	上高地・冬景	舟 橋 恵子
<p>上高地撮影を友に誘われた。いつもは大掃除、おせち料理作りと家庭で忙しく過ごす年末だが、厳冬期の上高地、氷の造形美が見たい、その気持ちを抑えられずに出発。夕暮れ時邪魔者だった枯れ木は、今朝は主役、雪と氷の上高地。凍てつく霧氷、ピーンと張りつめた冷気、静寂の世界は広がる。曇りの天気、モノクロームに近い情景が、その神秘性を一層に強調した。</p>		
13	冷気	松原 貴代司
<p>厳冬期の後継での撮影では、烈風と肌を刺す冷気に迎えられる。撮影時の薄手の手袋では指先が痛み出し感覚を失いがちになるが、じっとチャンス待つ。三脚ごと吹き飛ばされそうになりながらも息を止め、機械式のピント合わせを進める。煌く雪面にピシリと決まった時は、冷気と一瞬意気が合ったような感覚を味わう。</p>		
14	爐く美ヶ原	梁 瀬 久 雄
<p>2月の美ヶ原、果てしなく続く広大な白銀の大地に霧氷がメルヘンの世界を創り出す。今朝は氷点下20度にもなるのか。静寂を突き破るごとく、大牧場の彼方から眩い委ばかりの逆光が白銀を染め、足元が燃え上がった。雪の結晶一粒一粒が煌き、霧氷が輝く。山頂からは戸隠や妙高、北・中央・南アルプス、東には浅間連山、八ヶ岳、富士山と大パノラマが展開する。</p>		